

現実の向こうにあるものを見抜く

第一朗読 (出エジプト2章1-15a節)

1 レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとつた。2 彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。3 しかし、もはや隠しきれなくなつたので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピツチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。

4 その子の姉が遠くに立つて、どうなることかと様子を見てみると、5 そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやつて取つて来させた。6 開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きつと、ヘブライ人の子です」と言つた。7 そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」

8 「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。9 王女が、「この子を連れて行つて、わたしに代わつて乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言つたので、母親はその子を引き取つて乳を飲ませ、10 その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行つた。その子はこうして、王女の子となつた。王女は彼をモーセと名付けて言つた。「水の中からわたしが引き上げた(マーシャー)のですから。」11 モーセが成人したところのこと、彼は同胞のところへ出て行き、彼らが重労働に服しているのを見た。そして一人のエジプト人が、同胞であるヘブライ人の一人を打っているのを見た。12 モーセは辺りを見回し、だれもい

ないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺して死体を砂に埋めた。13 翌日、また出て行くと、今度はヘブライ人どうしが二人でけんかをしていてた。モーセが、「どうして自分の仲間を殴るのか」と悪い方をたしなめると、14 「誰がお前を我々の監督や裁判官にしたのか。お前はあのエジプト人を殺したように、このわたしを殺すつもりか」と言い返したので、モーセは恐れ、さてはあの事が知れたのかと思つた。15 ファラオはこの事を聞き、モーセを殺そうと尋ね求めたが、モーセはファラオの手を逃れてミディアン地方にたどりつき、(とある井戸の傍らに腰を下ろした。)

福音 (マタイ11章20-24節)

20 それからイエスは、数多くの奇跡の行われた町々が悔い改めなかつたので、叱り始められた。21 「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところで行われた奇跡が、ティルスやシドンで行われていけば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰をかぶつて悔い改めたにちがいない。22 しかし、言つておく。裁きの日にはティルスやシドンの方が、お前たちよりまだ軽い罰で済む。23 また、カファルナウム、お前は、

天にまで上げられるとも思っているのか。

陰府にまで落とされるのだ。

お前のところではなされた奇跡が、ソドムで行われていけば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。24 しかし、言つておく。裁きの日にはソドムの方、お前よりまだ軽い罰で済むのである。」

朗読から祈りへ

―使命の道―

モーセは神から選ばれた者。すべての人には神から使命が与えられていると思うが、モーセの使命は特別なものだったといえる。民を奴隷の状態から解放し、約束の地に導く使命。このような使命を受ける人は苦勞を伴う準備の時がある。苦渋に満ちた時が。ときとして死に直面するときも。それは身体的なことであつたり、精神的、心理的なことであつたりする。泣くこともある、叫ぶこともある、もたえることもある、傷つくことも、逃げ出すことも…。

自分の使命に生きている人がいる。そのような人は自分をよく知っている。そのような人に共通していること、それは、「打ちのめされた」体験をしていること。地に這いつくばつた経験をした人。同胞からさえ、はねつけられ、友と思つていた人からさえも裏切られる。そして、そこから「一筋の光」を見出した人。這いつくばつたがゆえに、引き上げてくれる力を体験した人。そのような人は

強い。そのような人はやさしい。そのような人は人を受け止め、包み込むことができる。自分自身がその体験をしているから。

モーセも、そしてイエスもその使命を生き、遂行するために苦しい思いをした。イエスは命さえも奪われた。

―奇跡に見えるが―

「奇跡」と訳されているギリシャ語の言葉は「デュナミス」。「力」を意味する言葉。それゆえ、その力の背後にある存在を表すために「全能の神」と訳されることもある。神の力が働いて起こつたことが奇跡。人には奇跡と見えることの背後には神の働き、力がある。それを見るとき、人は悔い改め、変えられる。「奇跡」はふだん起こり得ない特別なこととして意識される。しかし、神は普通の、自然の中で働いている。この世には数多くの奇跡が行われているのである。

「悔い改める」と訳されているギリシャ語の言葉は「メタノイア」。「方向を変える」、「考え方を変える」を意味する。

日々の生活の中に、現実が起こっていることの中に神の働き、力を見るために方向を変える。それが悔い改め。イエスも「悔い改めて、福音を信じなさい」と言われた。先に福音

があるのではない。先に悔い改め、方向転換がある。現実の向こうにあるものを見抜いたとき、そして、それが神の力であることに気づいたとき祝福がある。

「奇跡」が起こりました！ 病気がよくなりました！ 手を置いて祈つたら、病気が快復しました！ このようなことをたまに聞く。神父さまは奇跡を見たことがありますか、とも聞かれる。何度も、数えきれないほどある、と答えている。

手を置いたから快復したのではない。祈つたからよくなったのではない。神がそう望まれたからそうなった。その奥にある力が見えるまで「悔い改め」なければ、「奇跡」も人の力で起こつたと勘違いしてしまう。神をたえるのではなく、人を褒めることになる。

「わたしの望みではなく、神の望みが実現しますように」とわたしたちは毎日祈っている。そのようなところで、そのような目で現実を見るとき、そこに神の望みが実現していることが見えてくる。神の力が働いていることに気づくと神はすごいと思ひ、ここから神を賛美することができる。

わたしが今いることが奇跡であり、この世が存在することが奇跡である。なぜなら、そこには神の力が働いているから。(M・M・Y)